【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】（小学校用）

都道府県名	鳥　取　県

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

学校名	鳥取県倉吉市立河北小学校								
学　年	１年	２年	３年	４年	５年	６年	特殊学級	計	教員数
学級数	３	３	２	２	２	２	２	１６	
児童数	６４	７８	７１	６９	６４	７４	６	４２６	２３

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

輝く瞳とみがきあい
～あたたかい人間関係の中で、自ら考え、学び合う子どもの育成～

２．研究内容と方法

(1)　実施学年・教科

・全学年　算数
児童の理解に差が出やすい教科であり、全学年で系統的に取り組む必要がある教科であるため。

(２)年次ごとの計画

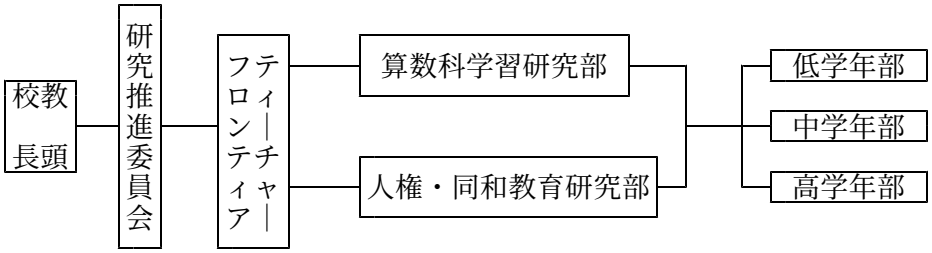
平成15年度

○研究テーマ
算数科を中心に「分かる授業」をめざし、基礎・基本の確実な定着を図る。
○研究の見通し
算数科を中心に Ｔ・Ｔ や少人数学習を行い、子どもたち一人一人に「分かった」「できた」という充実感をもたせるための取り組みを進める。
○研究の内容・方法
①ねらいを達成するための算数学習の時間の工夫
ア）発達段階に応じたノート指導を徹底する。学級ごとに指導に差がないよう共通理解する。中・高学年においては、考えの跡が分かるようなノート作りをめざす。
イ）算数的活動を取り入れた学習の充実を図る。
・自分の考えをしっかり持ち、友達にそれを伝えることのできる力を身につけさせる。
・評価につながる毎時間の学習の反省カードの工夫をし、指導と評価の一体化を図る。
◎学習の最後５分間を大切にした授業展開
◎１時間１枚の反省カードに評価問題を盛り込み、学習の最後に何も支援を行わず自力で解かせて、定着を見る。
② Ｔ・T、少人数学習等による、個に応じたきめ細かい指導の工夫
・１・２年生のＴ・T、３・４・５年生の２Ｃ３Ｔ（国、算）、６年生の１Ｃ２Ｔ（算）の少人数学習の充実を図る。特に３年生以上では、習熟度別学習を継続し個人差に応じた指導の工夫に取り組む。
ア）習熟度別少人数学習においては、各コースの特徴を明確化し、各コースに合った指導法や教材教具の工夫をする。
◎ねらいは同じだが、使用するプリントや着眼点を変えて個に応じた指導をする。
◎コースによって、体験的活動に重点を置いたり、パソコンで学習をするなど、特徴を持たせる。
イ）少人数指導担当教員が入っている３年生以上では、常に３名の教員が連絡を密にし、学期末の評定も３人で情報を持ち寄って行うなど、多

	角的に個を見ていく。 ウ）学力向上（ＬＤ等）加配教員による個別学習の推進 ③その他 ア）学期ごとの「学習の反省」学年終わりの「学習についてのアンケート」 イ）５分間のスキルタイム「大地の時間」の設定　（計算・視写） ウ）教師手作りの教材や、算数環境作り エ）河北小独自の家庭連絡票「大地大空」　（2002 年度より） オ）各クラスに担任以外の教員が出かけて行う（何先生がこられるかわからない） 「お楽しみ朝の会」「お楽しみ給食」を設定し、全職員で児童を多角的にみていく。

平成16年度	○基礎・基本を確実に身につける国語科学習のあり方 ○研究の見通し 国語科を中心に、基礎・基本を確実に身につけるための授業改善を行うとともに、あらゆる場で表現力を養う取り組みを行い、思いや考えを豊かに表現する子どもを育成する。 ○研究の内容・方法 ・理論研究・授業研究による学習改善 ・表現力を養うためのさまざまな取り組み ・言語環境の工夫・改善

（３）研究推進体制



Ⅲ　平成１５年度の研究の成果および今後の課題

１．研究の成果

①「みんなでやる」「最後までやる」「保護者を巻き込む」という合言葉のもと、全職員で話し合いを重ねがら進めた結果、教師同士の連携が深まり、同じ考え方で子どもの指導に当たることができた。

②習熟度別学習や Ｔ・Ｔ 学習を進めることで、教材研究やコースごとの特徴を生かした指導について研究が深まり、児童一人一人に応じたきめ細やかな指導ができつつある。
③毎時間のねらいを明確にし１時間ごとの反省カードを有効活用することにより、子どもの学習意欲が高まり、自分の学習を振り返る姿勢が身につきつつある。

２．今後の課題

①１学年が７０人前後という人数のため、少人数学習といっても基礎コースを少ない人数にすればするほど、他のコースが３０人を超える場合もある。さらに個に応じた指導を工夫する必要がある。
②児童一人一人が自分の考えを持ち、それを表現する力を持つことによって、練りあい、学びあう学習が生まれてくる。さまざまな形で、「表現力」を養う取り組みを推進する必要がある。

Ⅳ　学力等把握のための学校としての取り組み

○計算力実態調査　　５月実施
前学年までの各学年別の基礎的な計算問題（１０問）のテストを行い、定着度の低い領域の指導に力を入れたり、個別に支援が必要な児童の把握に生かしている

平均正答率　　２００３年５月調査

%	１年問題	２年問題	３年問題	４年問題	５年問題
２年	９９				
３年	９８	９０			
４年	９８	９４	８３		
５年	９１	９１	８６	７１	
６年	９５	９５	８８	７１	７８

この結果により、高学年において第４学年の学習内容に大きなつまずきのある児童が多いことがわかり、「大地の時間」等において、その内容について習熟を図るなど、手立てをすることができた。
この調査は第２回目を２月末にも行い、その推移を見る予定である。

○鳥取県基礎学力調査（３年は国語,算数　　６年 国語,社会,算数, 理科の４教科）
１月実施
昨年度より始められた県の悉皆調査で、児童の関心・意欲・態度をも見えるような問題や、思考力を問う問題が中心で、領域別とともに観点別の結果も分かる。
教科のテストとともに、子どもたちを取り巻く学校や家庭地域についての意識調査も行うので、昨年度は、学力との関連も含めて全職員で分析考察を行った。
○ NRT 学力検査　（１・２年は国語,社会の２教科）　　毎年１月実施
（３～６年は国語,社会,算数, 理科の４教科）
実施後１ヶ月ほどで、コンピュータによる診断が個別に送られてくるため、個々の学力の定着を見て評価と指導に生かすとともに、学年末に保護者にもその結果とこれからの課題や方向性を伝えることができる。
○鳥取県診断テスト（全学年・国語,算数 ）　毎年２月実施
各教科別研究部が作成したもので、各校の正答率と郡市別・全体との関連を見ることができる。それぞれ、領域別の正答率や誤答例を分析考察し、その後の指導や次年度の年間指導計画作成にも生かしている。
○チャレンジテスト　（全学年　国語と算数）　学期に１回　朝２０分間
いわゆる全校テストとして学んだことを振り返る場とし、学年の実態等を考慮しながら「賞状」を出すなどして、ドリル的な問題への意欲を高めた。

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

○授業研究会の公開
校内の授業研究会は、主に同じ中学校区の学校には毎回紹介し、ともに研究を深めることができた。
特に１０月に行った筑波大学附属小学校の坪田耕三先生による示範授業は、５年生を　対象に、同じねらいの内容で違うコースのこどもたちに時間をずらして授業をしていた　だいた。少人数学習のコース別の指導内容を考える上で、たくさんの先生方においでいただき、研究を深めることができた。
○鳥取県中部地区学力向上推進協議会　　平成１６年１月２７日
○鳥取県教育研究会　　平成１６年２月１０日

◇　次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること（複数チェック可）

【新規校・継続校】　■１５年度からの新規校　□１４年度からの継続校
【学校規模】　□６学級以下　□　７～１２学級　■１３～１８学級　□１９～２４学級　□２５学級以上
【指導体制】　■少人数指導　■Ｔ・Ｔによる指導　□一部教科担任制　□その他
【研究教科】　□国語　□社会　■算数　□理科　□生活　□音楽　□図画工作　□家庭　□体育　□その他
【指導方法の工夫改善にかかわる加配の有無】　■有　□無